夫の様子がおかしいのですが!?

～クールで仕事人間だった彼が
溺愛ビーストに豹変しました～

目　次

夫の様子がおかしいのですが!?　5
番外編　夫が見たもの　249

夫の様子がおかしいのですが⁉

1

今日という日がどんな一日なのかは、終わってみないとわからない――

御影志保の今日は、いつもと変わらず平凡だった。税理士として受け持っているクライアントとの打ち合わせが一件、夕方から入っていたくらいで、いつもと変わらない一日。

十七時を過ぎても、七月下旬の太陽は容赦ない。大きな窓ガラスから灼熱光が燦々と降り注ぐ中、寒いくらいにエアコンが効いたカフェのボックス席で、志保はタブレットに表示したファイルのページを捲った。

「――今月も順調だね。このペースでいくと、年間売り上げ二〇〇〇万円台に乗りそう」

「うおおお。嬉しいのに税金が怖えぇ……」

「フフフ……法人税と所得税、それから住民税。合わせて二九〇万円くらい覚悟してもらおうか。ちなみに、同じ収益でも個人事業主の場合は四四〇万円で、一・五倍以上の納税額になるのよん。ほら、わたしの言った通り、個人事業主じゃなくて法人にしてよかったでしょ？」

ついでに、来年からは消費税の納税義務もあることを告げると、向かいの席の男は、逃れられない義務に大いに顔をしかめる。起業して二年目。思ったより納税額が多かったらしい。

黒い半袖のシャツとジーンズというラフな格好の彼は、テーブルに両手をついて大袈裟に頭を下げた。

「ははぁ～志保様々！　ありがとうございます！　全部おまえの言うこと聞く！」

彼は幡野良司といって、志保の大学時代からの友達だ。十八歳の頃から、かれこれ九年の付き合いになる。テニスサークルで親しくしていたよしみで、志保が顧問税理士をしているのだ。彼は志保の結婚式にも来てくれた。

かなり明るくノリのいい男で、陽に焼けたムキムキな身体をしているくせに、凄腕のＩＴエンジニアなんだから人は見かけによらない。

志保は預かった今月分の領収書を鞄に入れた。

「できる節税対策はもうやっちゃってるから、設備を買い替えちゃう？　パソコンとか」

「設備を新しくしたってさぁ、データやらを移管してまた設定するのがだりぃんだって。そもそも買ってまだ二年経ってねぇ。もったいねぇって……」

「堅実でよろしい！　他に質問はない？」

テーブルの上で手を重ね、笑顔で小首を傾げてみせると、幡野はチラッと窺うような視線を向けてきた。

「……今日はもう上がりか？　一緒に飯食いに行かね？」

「……」

まただ。笑顔の裏ですーっと感情が引いていく。

月に一度の月次顧問業務で会うたびに、幡野は志保を食事に誘ってくる。だがその誘いに、クライアントと顧問としての付き合いや、ただの友達としてのそれとは違うなにかを感じ取れないほど、志保は鈍くない。

「どうせ旦那は出張か、帰ってきたとしても遅いんだろ？　ひとりで飯食うくらいだったら俺と食えばいいじゃん。どうせ向こうも勝手によろしくやってるって」

「わたしは帰る。誘ってくれてありがとう」

〝ありがとう〟という耳触りのいい盾をガツンと突き立て、厳格な一線を引く。

志保は結婚している。

食事くらいと思う人もいるかもしれないが、誤解を招くようなことはしたくない。

たとえ本当に、夫が出張で海外に行っていて、今日も帰ってこないのだとしても。

志保が席を立つのと同時に、幡野はソファにだらりと身体を預け、不貞腐れたように言った。

「もう離婚しちまえよ……子供がいるわけでもねぇんだしさぁ、結婚してる意味ないだろ。おまえをほっとく旦那なんかいらねぇって。俺だったらおまえをひとりにしねぇ」

「亭主元気で留守がいいって言うでしょ？　わたしは平気よ」

そう言って柔らかく微笑んだのだが、幡野は痛ましいものを見るような目を向けてくるのだ。

「強がんなよ」

「強がってないってば。ほんと大丈夫なんだって」

「嘘吐け。おまえが寂しそうな顔してるのを見るたびに、俺はまだ諦めなくていいんじゃないかって思うんだよ……。どうせしつこいとか思ってんだろ。しつけぇよ、俺は……」

後半は独り言のようになっていた彼に、これ以上どう言ったものか迷う。

男女の友情が夢物語だとしても、志保は彼のことを友達だと思っている。同時にクライアントでもある。そして仕事は終わった。

それなら――

「領収書、もらっていくね！　じゃあ、お疲れさま！　また来月。お盆明けにメールする」

鞄を肩に掛けて、有無を言わさず幡野に背を向ける。そのままカフェを出て、颯爽と駅へ向かった。

強がってなんか……いないから。

「ただいま……」

自宅マンションに帰ってきた志保は、玄関の電気をつけながら独り言ちた。返事はない。誰もいないのだから当然だ。

夕陽を受けて薄ぼんやりとしたリビングに入ると、朝出掛けたときのままの空間がそこにある。熱帯魚を飼っている水槽だけが眩く光り、コポコポと音を立てていた。

ハイソなタワーマンションの南向き、４ＬＤＫ。ローン完済。公園も、保育園も、小学校も近い、所謂子育て世帯向け住宅。人気の間取りで広さは申し分ない。夫が仕事で関わった物件らしい。

志保は一年のほとんどを、この部屋でひとりで過ごしている。
パチッとリビングの電気をつけると、水槽の魚たちが一斉に方向転換する。おかえりの合図だ。
ポールハンガーに鞄を掛けて、志保はなんとなく自分のみぞおちに手を当てた。
「……」
どうにも胃が重い。今日のランチタイムに、事務所の女の子たちと中華を食べたのだが、油にあたったんだろうか？　それとも消化不良か……
胃の具合は気になるが、今は先にシャワーを浴びよう。
「ふう……」
グレーの薄手のジャケットを脱いで、ソファの背もたれにひょいっと掛ける。カーテンを閉め、誕生日に夫がプレゼントしてくれたペアの腕時計を外してチェストに置くと、そのままバスルームに向かった。
ザーッと頭からぬるめのお湯を浴びながら息を吐く。
――疲れる。
幡野は悪い人ではないのだけれど、志保を困らせる。長い付き合いだし、クライアントでもあるから無下にできない分、ちょっと疲れてしまう。
シャワーを浴びた志保は寝間着にしているTシャツとショートパンツに着替えた。濡れた髪を拭きながら魚に餌をやり、キッチンに入る。
どうにも食欲がなくて、マグカップにインスタントのスープを作ってダイニングテーブルに置く。

熱々のスープをスプーンで掻き混ぜながら冷ましているうちに、視線がふと、水槽の横に飾ってある結婚式の写真に向かった。
天気のいい日に、屋外で撮ったお気に入りの一枚だ。黒髪を後ろに撫で付けた長身の男の腕に抱かれて、純白のドレスを身に纏い、幸せそうに微笑んでいる過去の自分が……今は切ない。
（……もう、何日あの人の顔を見てないんだろ……）
志保は二年前に結婚した。夫は八歳年上の三十五歳。男盛り、働き盛りだ。
甘い言葉を囁いてくれるわけでもなければ、どこかに連れていってくれるわけでもないけれど、とにかく真面目だし、よく働く。
出張が多いのが玉に瑕だが、そのたびに志保にお土産を買ってきてくれる優しい人だ。
クールだし、とっても紳士的。そしてなにより顔がいい。三十半ばでも草臥れたところのない凛々しい顔立ちで、二重のラインがくっきりしていて、彫りが深いのだ。おまけに背も高い。顔に一目惚れしたと言っても過言じゃない。
彼とは親の紹介で出会った。志保の父親はそこそこ大きな会社を経営していて、特に投資や不動産に力を入れている。その関係で、建設系総合商社勤務の夫と知り合ったのだ。
夫が勤務している総合商社は夫の父親が経営していて、夫の兄弟三人全員が社員だ。社長である父親が、「より成果を上げた者を後継者にする」と公言しているので、誰が後継者になるかで夫の兄弟は競い合っている。
そしてその中で、一番後継者の椅子に近いと言われているのが、志保の夫――御影颯馬だ。

親に紹介され、気が合いそうだから付き合って、一年でプロポーズを受けて結婚した。特に波乱もドラマもなかったけれど、志保はそれでいいと思っていた。クールな彼が自分にだけ特別優しくしてくれるのはすごく嬉しかったし、彼となら幸せになれると思ったから。

結婚した夫が、新婚旅行の直後から出張を入れたことにちょっと疑問は持ったけれど、彼の職場での立場を思えば強くは言えなかった。だって頑張っている夫を妻として支える……それが自分の役目だから。

月に一度は必ず帰ってきてくれるけれど、彼が家にいる時間は短い。でも、亭主元気で留守がいいと昔から言うじゃないか。一生懸命働くのはいいことだから、それを責めるなんて間違っている。

彼は頼り甲斐のある、いい夫。家計の心配はいらないんだし、自分は幸せ。夫婦なんてものは、これが普通なんだって。

だから……だから寂しくなんか――

『もう離婚しちまえよ……子供がいるわけでもねぇんだしさぁ、結婚してる意味ないだろ』

今日、幡野に言われた言葉が脳裏をよぎる。気が付いたら浅く唇を噛んでいた。

自分が心のどこかで思っていて、必死に否定していることを言葉にされて、胸が痛い。これが〝図星〟ってやつなんだろうか。

夫のことは好きだ。愛しているし、尊敬だってしている。なにも本気で離婚なんか考えていない。だって浮気されているわけでもないし、蔑ろにされているわけでもない。夫婦仲だって悪くない。ちょっと出張が多いだけ。

まぁ、彼が釣った魚に餌はやらないタイプだったと言えるかもしれないが、それだけで離婚だなんて馬鹿げている。

でも……それでも時々思ってしまうのだ。

こんなにバラバラで、家族って言えるの？

結婚している意味ってあるの？

わたしは本当にあの人に愛されてるの？

釣った魚に餌をやらなければ、魚は飢えて死んでしまうのに……

――わたしはいつまであなたを待てばいいの？

今この状況が、結婚するときに求めた幸せとは程遠い気がして……

（……離婚したら……もう、寂しくないのかなぁ……）

ひとりでいる孤独と、側にいるはずの人がいない孤独、あなたはどっちが寂しい？

「……」

ああ、余計なことを考えてしまった。ひとりでいる時間が長すぎる弊害だと思いつつ、気持ちを切り替えようとぐびっとスープに口を付ける。

思ったより冷めていたそれに顔をしかめ、無言で全部飲み干した。そしてついでに、日頃お世話になっている胃薬も流し込む。

マグカップを片付けてリビングのソファに移動した志保は、重力に従って身体を横たえた。

「はぁ……」

自分で自分を抱き締めるように、きゅっと身体を丸めて目を閉じる。
寂しくなんかない。だってここで待っていれば、あの人は絶対帰ってくるから。帰ってきたら、いつものように次の出張までは側にいてくれる。
――だから、寂しくなんかない。大丈夫。大丈夫……わたしは愛されている。
不安に思う必要なんてない。こんなにいい部屋に住ませてもらって、衣食住なにひとつ不自由はない。彼は志保の仕事に口出ししないし、なにかを強要したりもしない。だから幸せ。求めすぎてはいけない。
そう自分に言い聞かせ、志保はゆっくりと目を開けた。今日はもう開かないとわかっている玄関をぼんやりと見つめる。
リビングと廊下のドアを閉め忘れたなぁとか、玄関のドアロックをしてないような気がするから確かめないととか、髪を乾かさなきゃとか、とりとめのないことを考えて――結局、まぁいいかと再び目を閉じた。
（……今週末、帰ってくる……楽しみ……）
もう今日が終わる。そして明日が来る。また一日、あの人に会える日が近付いてくる。週末はあの人の好物を作ろう。喜んでくれるだろうか？
そんなことを考えながら、志保はうつらうつらしはじめた――

どれぐらい時間が経っただろう。志保の濡れた髪がすっかり乾いた頃、今日はもう開かないはずの玄関が突然開いた。
「志保！」
微睡（まどろ）んでいた瞼（まぶた）がしっかりと持ち上がる前に、強く抱き締められる。
「――え？　颯馬、さん？」
これは夢？　それとも現実？　彼の帰宅は週末だと思っていたけれど、もしかして今日だった？　日付を思い違いしていたんだろうか？
（そんな、わたし、ご飯作ってないのに！）
慌てて身体を起こしたが、スーツ姿の彼にますます強く抱き締められ、間近で感じる愛する夫（ひと）の体温と、懐かしささえ覚える匂いに、胸の奥が切なく疼（うず）いた。
帰ってきてくれた。しかも抱き締めてくれている――突然のことで驚いたけれど嬉しいことには変わりなくて、少し前までうだうだ考えていたことが吹き飛んでしまう。
志保は颯馬の背中に両手を回そうとした。
「おかえ――」
「今までひとりにして悪かった！」
「えっ？」
唐突な謝罪に面喰らって目を瞬（またた）かせる。驚きに反応が遅れた志保の両肩を抱いて、颯馬はなおも凄（すさ）まじい勢いで言い募ってきた。

「俺が全部悪い！　すまなかった！　この通りだ！　だから離婚なんか考えないでほしい！」
「ええっ!?」
（り、離婚ンンン!?　え、わたし、離婚考えてると思われてるのっ!?　なんで!?　えっ、ほんとになんで??　なんでそうなるの!?）
確かにちょっと……ほんのちょっとだけふわっと考えたけど、全然本気なんかじゃなかった。なのに夫の口から〝離婚〟なんて物騒なワードが出てきて、頭の中に大量の〝?〟が浮かび上がり、激しく狼狽する。
颯馬と喧嘩なんかしてない。ずっと仲良くやってきたはずだ。離婚の理由なんてないはずなのに！
「お、おおおお、落ち着いて？　ねっ、離婚だなんてわたし――」
考えてないよ――そう言おうとした志保を遮って、颯馬が真顔で迫ってきた。
「幡野良司！　俺たちの結婚式に来た君の大学時代の知り合いの幡野良司！　あいつに言い寄られてるんだろう!?　離婚しろとか言われてるんだろう!?」
「なっ、……あ、い、いや、それは……」
そんなことはないと強く言い切ればよかったのかもしれない。でも動揺が先に来てしまった。他の男に言い寄られていることを夫に知られていたなんて、絶妙に気まずい。いや、志保は一度も幡野に靡いたことはないし、まったくやましいことはないのだけれど！　それでも気まずい。気まずすぎる！　しかも、今日も幡野に〝離婚しろ〟と言われたばかりで――

ぴゅーっと視線を泳がせて口籠もった志保を見て、颯馬の整った顔からサーッと色がなくなっていく。彼は戦慄き、奥歯を噛み締めた。
「やっぱり言い寄られてるんだな!?　あの野郎……俺は絶対別れないぞ……絶ッッッ対！　絶対に別れないからな!!　絶対にだ！」
地を這うような低い声が、だんだんとヒートアップしていく。こんなに感情をあらわにする彼は見たことがない。
彼はクールな人だった。何事にも動じないし、感情の起伏だって激しくない。冷静沈着で、そこが格好いい人だったのに――
（ど、どどどどうしちゃったの……!?）
思わぬ夫の一面に呑まれ、志保は完全にフリーズしていた。そしてそんな志保を、颯馬は力いっぱい抱き締めてくる。
「君がいない人生なんて考えられない。考えたくない……愛してるんだ……！」
「っ!!」
突然の告白に、心臓がドクンと脈打つ。隠しきれない歓びが血流に乗って、固まっていた全身に広がっていくようだ。
（あ、愛してるって……愛してるって……！）
こんなにストレートな言葉をもらったのはいつぶりだろう？　プロポーズのときぶり？　あまり積極的に愛情表現をする人ではなかっただけに、受け取り慣れていない志保の頬が、ぽんっと熱く

なる。
嬉しさと、照れと、戸惑いが、〝わたしも愛してる〟という言葉をコーティングして、違う言葉に変えた。
「わたしは、どこにも行かないよ……？」
ここにいるのはあなたを愛してるから。それ以外に理由はない。だからこれからもずっとここであなたを待つの――
視線を合わせた志保が小首を傾げながら微笑んでみせると、颯馬はくしゃりと表情を歪めて志保の肩に額を押し当ててきた。
「……わかってる。はぁ――ごめん。取り乱した。ちょっと頭冷やしてくる……」
大きく息を吐いた彼は持ち前の冷静さを取り戻したのか、志保を抱き締めていた手を解いて、座り込んでいた床から立ち上がった。そうして颯馬の手が自分から離れそうになった途端――
「志保？」
「あっ……えっと……あの……」
自分が無意識のうちに彼のスーツの上着を掴んでいたことに気付いて、慌てて手を離した。
もっと抱き締めて、離れないで……お願い――そう、素直に甘えられる性格ならよかったかもしれない。間違いなく志保の深層心理は彼を求めていたから。でもうまく言えなくて、志保は視線を彷徨わせた挙げ句、誤魔化すように笑顔を作った。
「あっ、お風呂、入る？　よね？」

「……」
颯馬は二秒ほど微動だにしなかったが、突然志保を横抱きに抱え上げた。
「ひゃっ！」
浮遊感に心臓がバクバクする。
そして動揺する志保を連れて、彼は無言で寝室へ向かった。
ダブルベッドにぽすんっと寝かされて、パチパチと瞬きする。
寝室は暗いがドアが開けっ放しなので、リビングからの光が射し込み、志保の腰を跨ぐ颯馬のシルエットを浮かび上がらせる。上着を脱ぎ落とし、ネクタイを緩める夫を見上げながら、志保の鼓動はうるさいくらいに高鳴っていた。
（こ、これはもしかしなくてもそういう流れ？　こんな急に？　どうして？）
「あ、あの……そういうつもりじゃなくて……あの――」
「そんな表情されたら無理。スイッチ入った」
「え……」
どんな表情をしていると言うんだろう？　わけがわからないまま、覆い被さってきた夫にキスされる。有無を言わさず口内に入ってきた彼の舌に目を見開くのも束の間、深く根元から絡められる。
久しぶりのキスは息もできないほど烈しい。その烈しさに翻弄されて息が上がるのと同時に、身体が火照ってキスだけでじんわりと濡れてしまう自分が恥ずかしい。
急に求められて心は戸惑っているのに、身体は――

「志保……志保……愛してる。俺の志保……」
——彼の囁きだけで、露骨に反応する。
志保の初めては颯馬だった。颯馬しか男を知らないまま結婚した。出張から帰ってくるたびに彼は抱いてくれたけれど、こんなに性急に……烈しく求められたことはない。
彼はいつも、壊れものを触るようにゆっくりと丁寧に抱いてくれた。余裕のある彼しか志保は知らなかったのだ。
いつもと違う行為が志保を掻き乱し、そしていつも以上にドキドキさせる。
「ん……ん……は……」
熱い吐息をまぜ合わせ、とろみを帯びた舌を吸い上げられる。くちゅくちゅと響く濡れた音に耐えかねて身を捩ってみたけれど、覆い被さった夫はビクともしない。それどころかより強く抱き込まれキスが深くなる。そして、太腿に興奮状態の物を押し充てられた志保は、まるで処女のように固まってしまった。
（どうしよう、すごく……硬い）
思わずじゅんっと濡れてしまう。
動けなくなった志保のTシャツの中に、熱い彼の手が侵入してきて、腰のくびれを通ってシンプルなナイトブラに覆われた乳房に触れてくる。布越しでも強めに揉まれると、強烈な被虐心が襲ってきて身体がゾクゾクする。
「んーんー……んん……」

キスをしたまま今度はショートパンツがショーツと共に引き下げられる。いきなり脱がされた羞恥心で、志保はカアァッと赤面した。
「ま、待って……待って、こんな急に……」
「駄目。待てない」
動揺する志保の脚からショートパンツとショーツを引き抜き、足首を掴んでグイッと脚を折り上げながら、反対の手で自分のベルトを外すのだ。
「志保が欲しい」
宣言のような囁きと共に、猛りきった屹立が蜜口に押し充てられ、そのまま一気に奥まで挿れられ——
「ああっ！」
鋭い摩擦熱に目を見開いて仰け反るのも一瞬。子宮をどちゅっと突き上げられて、視界に白く火花が散る。大きく腰を打ち付けながら、首筋を舐め上げ強く抱き締められ、みるみるうちに隘路が潤んでいく。
彼の物がいつもより硬くて太い気がする。志保も強引に求められたことに変に興奮しているのか、いつも以上に濡れてしまう。もう、奥からどろどろだった。
「は……志保……俺の気持ちわかる？　好きなんだよ……愛してる……君をこんなに愛してるのに——全然伝わってない気がする……！」
強く反り返った物でお腹の奥をズンズンと突き上げられて、その烈しさに子宮が震えてしまう。

颯馬が腰を鋭く引くたびに、大きく鰓の張った雁首が、志保のお腹の裏を容赦なく擦り、高い声を上げさせる。

颯馬は怯えてずり上がる志保の腰を引き寄せ、力尽くで押さえ付けながら、志保が誰の女なのかをわからせるかのように、奥、奥、奥……ひたすらに奥を突いてきた。

「わかる？　志保……俺が君を愛してるって」

「ひぁ……あっ、アアッ！」

（だめっ……こんな、はげしぃっ……！）

ろくな準備もないまま挿れられたのに、女の身体は正直だ。愛する男に求められた悦びに昂って、颯馬の太い物をぎゅうぎゅうに締め付けて放さない。颯馬しか知らない身体は彼の物に自分から吸い付き、襞を絡めて快感の密度を上げる。

颯馬は自身のシャツを脱ぎ捨てると、志保の脚を抱え込み、膝を胸まで折り上げて強く腰を叩き付けてきた。

いつもと違う、がむしゃらに腰を打ち付ける行為が、力強い雄に性的に支配される悦びを志保に与える。

いつも余裕のある彼が、我を忘れて自分を抱いている事実に興奮してしまう。こんなになるほど……獣のように本能で欲しがってくれていることが嬉しい――

（すごい……ああっ、すごい……こんな……）

志保はいつの間にか、颯馬の肩に縋り付いていた。

「ああっ、あんっ、ん、く……あ……ひぅ……」

「志保、志保……好きだよ。愛してる。志保は？　志保は俺のこと好き？　愛してる？」

颯馬は志保の頬を撫で、喘ぐ唇にキスしながら、何度も質問を繰り返す。

「志保、答えて？　俺のこと愛してる？」

「う……うん、うんっ……あいして――ああっ！　う、おおっ、ん、う……アアッ！」

どちゅっと子宮口を押し上げられて仰け反って目を剥く。

気持ちいい。すごく気持ちいい。奥まで入ってる。この男に抱かれている幸せに心と身体が満たされて、発熱したように熱くなっていく。

「愛してる？　ちゃんと愛してるって言ってほしい。志保？　ほら、〝愛してる〟は？」

颯馬は志保のTシャツとキャミソール、そしてブラを押し上げ、ぷるんと乳房をあらわにして、喰らい付くようにむしゃぶり付いてきた。乳房を揉みながら吸われ、蜜路が更に締まる。その締め付けを振りほどくようにガツガツと奥を突かれると、昇りつめた身体が限界を迎えた。

「ああ～～っ、ああっ、うっ、うっ、は……あぁいくぅ、アアッ――」

意識が宙に浮いたように感じて、自分を抱く男を抱き締める。

最奥が痙攣してとまらない。身体の中を熱い杭で掻き回されるたびに、女としての快感を味わう。こんなに強く烈しく抱いてもらえるなんて。

悦びと歓びが身体を敏感にして、雄々しい屹立を咥え込まされた蜜口から、ダラダラと愛液が滴った。

「志保……俺を愛してるって言って」
「あ、あっ、あいして、りゅ……あいして……う、うぁ……ああ、すき……」
蕩けに蕩け、息も絶え絶えになりながら、なんとか声を絞り出す。
志保のやっとの言葉に、颯馬は目を細め、すりっと首筋に頬を寄せてきた。
「……志保、俺以外にその表情しないで。約束だよ？」
自分がどんな表情をしているのかわからないまま、ただ頷く。
「志保は俺の妻だから。誰にもやらない……絶対に……絶対に誰にも……。覚えておいて。離婚はしないし、あの男にも、他の誰にも絶対にやらない……！」
ぎゅっと抱き締められて、唇にキスされた。
柔らかく窪んだ舌にたっぷりと唾液を乗せて、くちゅくちゅと口内で絡められる。夢中でそれを飲み下すと、抽送が加速する。
たんたん、たんたんたんたん――と、腰を叩き付けられるたびに乳房が揺れる。そしてその揺れる乳房をめちゃくちゃに揉みしだかれながら、深く深く侵される。
力強さも深度もスピードもどんとん加速してとまらない。どちゅっどちゅっと子宮が突き上げられ、揺らされ、隘路がどろどろに泣かされる。
「あぅうう……ふかいぃ、はぁはぁはぁ……もっと……もっとゆっくり……」
「駄目。今夜は離さない。志保は俺の妻だから。遠慮なんかしないよ」
逃げようとする腰を乱暴に押さえ付けられて、じゅぼじゅぼっと濡れ音を烈しく響かせながら出

し挿れされてしまう。強制的な絶頂を味わわされ、ビクンビクンと痙攣がとまらない。
「まって……まって、おねがぃ、さっきいったばかりで、わたし……おかしく、なっちゃぅから……っ、あ！」
「いいよ。イクとこ見せて。志保が俺に抱かれて気持ちよくなってるところが見たい」
颯馬は志保の顔を至近距離で見つめながら、腰のスピードを加速させる。
「ふーふーぁ、ああ……いく……そう、まさ……いく、いくの、やぁ――」
「我慢しないで。隠さないで。いい子だから、ほら――」
愛液でぐずぐずに溶けたあそこがめちゃくちゃに掻き回され、肉襞はうねりにうねって颯馬の漲りをしゃぶり尽くす。こんなにいやらしい反応をする自分の身体が恥ずかしい。
恥ずかしいのに、とまらない。
志保は真っ赤になって涙ぐみながら蜜口をヒクつかせ、颯馬の雄々しい漲りを美味しそうにしゃぶった。
（だめ……すごい……きもち、いい……きもちいい……！）
「う～～うっ、アアッ！」
「出すよ」
子宮口に鈴口をぴったりと押し充て、目を剥いて仰け反った志保の奥深くに、熱い射液が何度も注がれる。身体の中に染み込むように広がる熱に、志保は思わず颯馬の背中を引っ掻いた。
「志保……」

彼はぐったりとした志保の唇をキスで塞ぎ、志保を包み込むように背中に両手を回した。そして繋がったまま、抽送を再開したのだ。
「ああっ、まって、そんな……だめ……んんっ、あ、はぁんっ！」
今しがた気をやったばかりなのに、続けてだなんて。しかも、注がれた射液が掻き回され掻き出され、とろとろと蜜口からあふれてくる。その羞恥心に身を捩った途端――
「駄目。逃がさない」
「アアッ！」
なにを言われたのか理解する前に、繋がったまま、志保の脚を抱えた颯馬に腰を回され、うつ伏せにさせられる。
充分濡れている上に、注がれた射液もあるからぬるんと滑る。それでも肉襞を三六〇度一気に擦り回されて、目の奥に火花が散った。後ろからなんて初めてだ。この体位は恥ずかしすぎて志保がいやがるから、颯馬もしないでいてくれたのに。
「ふぁああ……う、まって……まって……だめ……」
「待たないって言った」
颯馬は背中に乗り、志保の両手首を掴んで腰を振りたくってきた。
太い幹がじゅぶじゅぶと身体の中に出入りする感覚に息が上がる。目の前のシーツを掻き毟る志保にねっとりと口付けて、彼は耳に首筋にと舌を這わせてきた。
「ああ……愛してる。愛してるよ志保……君を抱くのは俺だけだ。君は俺の妻なんだよ」

甘い囁きを耳に吹き込みながら、颯馬は志保の寝間着のTシャツとキャミソール、ブラを脱がせてくる。そして裸になった志保の身体に両腕を巻き付けるようにして抱き締めてきた。そして両方の乳房を念入りに揉みしだき、ふたつの乳首を同時にきゅっと摘まんでくる。
「んっ」
乳首に刺激を加えられて、蜜口が本能で締まる。その蜜口にしっかりと漲りを扱かせ、颯馬は唇を啜ってきた。たっぷりと舌を絡められ、口の端から飲み込みきれなかった唾液が垂れる。
「反応して可愛い。志保の中、すごく気持ちいいよ」
彼はまた乳首を摘まんで志保の身体を操るように隘路の締まりを堪能してから、片手を下に滑らせてきた。そして手と膝を使って志保の脚を開かせ、脚の間に触れてくる。彼は繋がった処を丹念に撫でて、ふっと耳元で笑った。
「ああ……ぐちょぐちょ……」
精液と愛液まみれのそこを指摘されて、志保の顔がカアァッと熱くなる。脚を大きく開かされて、ただでさえ恥ずかしいのに……志保の身体をこんなにしたのは颯馬なのに……
シーツに顔を埋めた志保の耳を食みながら、彼はゆっくりと艶汁をなすり付けるように蕾を撫でてきた。ぬるぬるで、ちょっと触れられただけでも脳髄が痺れてしまう。
「んぅ、は……ぅうっ……！」
「は――すごい締まり」
颯馬の揃えた指先が円を描く。捕らえられた蕾が捏ね回され撫で上げられ、その甘美な刺激にす

すり泣く。颯馬はねっとりとした腰遣いで漲りを抜き差ししながら、志保の身体を味わいはじめた。
肉襞が漲りの凹凸にしっかり吸い付いて離れない。身体の中に籠もった熱が、行き場を失って涙に変わる。仰け反って目を瞑った志保の唇が、颯馬のそれに塞がれた。
ぐじゅっぐじゅっ、じゅぼっと、はしたない音が響く。硬く力強く反り返った漲りが、お腹の裏の好い処を容赦なく擦り、最後にはしっかりと子宮が狙い撃ちされる。
どちゅっどちゅっどちゅっどちゅっ――まったく遠慮のない抽送。脚を大きく開いた恥ずかしい格好でうつ伏せに押さえ付けられた志保は、身動きが取れないまま犯され、乳房を揉まれ、蕾を虐められ、喘ぐしかない。先に注がれた射液が、ひと突きひと突きされる毎に、子宮に流れ込み、逆流し、掻き混ぜられる。
「ああ……ううう……いく……ううう……いっちゃう……ああ……ああ……」
（すごい……きもちいい……はずかしい……もぉ、こんなにされたら……しんじゃう……）
乳首と蕾を同時に捻り上げられる。志保はダラダラと愛液をあふれさせながら、絶え間なく訪れる絶頂に泣いた。
「ひぃっ、もぉ、らめ……だめなの……ゆるして、ううう……」
「駄目。志保は俺のだから……愛してる……絶対離さない」
颯馬は力を込めた指先で蕾を捏ね回し、嬲りものにしながら抽送を烈しくする。志保は泣いて逃げようとした。だが、愛する夫に抱かれることに悦んだ雌の身体は、腰だけをクイッと持ち上げ、彼をより深く受け入れるポーズを取ってしまう。そして終いには、彼の射精を促すようにはしたなく腰を振りはじめた。
「あっ、う……ぃ、ううう……アアッ、いく……――ううう……あっ！」
泣き悦んだ身体がピンと突っ張って颯馬の漲りにしゃぶり付く。うねるような蠕動と痙攣をものともせず、颯馬は力強いピストンでしっかりと子宮を突き上げてきた。
「――――!!」
ベッドに突っ伏し、腰だけを高く上げた格好で声もなく絶頂する。頭が真っ白になる快感に溺れた身体に二度目の射液が注がれ、ガクガクと震えた。
しばらく腰を打ち付けていた颯馬だったが、最後まで注ぎきったのか「ふー」と息を吐きながら漲りを引き抜いた。
解放された志保の腰がとさっと落ちる。だらりとした脚の間から注がれたものが垂れてきたが、身動きひとつ取れない。気持ちよすぎて、もうなにも考えられなかった。
こんなに強引なセックスは知らない。こんな、独占欲を剥き出しにしたセックスは……
だって志保は最初から颯馬の女だったから。彼は焦る必要なんてなかったはずだ。それなのに急に――いったいどうしたというんだろう？
心は戸惑っているのに身体は――熱く火照って満たされている。
（はぁ……もぉ……すごい……）
こんなに強く烈しく抱いてもらえるなんて……いつもと違う。
でも、いつもと違うが故に興奮してしまう。

強引にでもいっぱい注いでもらって、恥ずかしいのに嬉しい。唯一無二の女として求められる歓びは、戸惑いに勝る。

快感の余韻に浸る志保の瞼や頬に、颯馬がキスしてくる。彼は初めは背中をさすっていたが、だんだんと下がってそれが腰になり、やがてさっきまで自身が入っていた蜜穴を触りはじめた。

「あ、もぉ、ら……」

力が入らないながらも懸命に身を捩る。けれどそんな志保の抵抗は意味をなさない。颯馬はふっと笑うと、ぬるりと指を蜜穴に挿れてきた。

「んぅ〜〜〜は……あぅっ……」

休みなく隘路を擦られて、ビクビクと身体が反応する。さっきイッたばかりなのに……

彼は鉤状にした指でぽんぽんとお腹の裏側を押し上げてきた。彼の指が動くたびに、お腹の中でぐじゅぐじゅと濡れた音がする。

「はぁ……俺のでぐちょぐちょ……」

颯馬が満ち足りた声を漏らす。志保の中が、自身が放った射液で満たされていることを確かめて喜んでいるようだ。行為の残滓を知られて恥ずかしいのに、指を出し挿れされると蜜口がヒクついてしまう。あんなに抱かれたのに……まだ物欲しげにうねってしまうなんて。

(……はずかしい……)

志保はこらえるように唇を噛んだ。でも、中から押し上げて起こされた蕾が、親指でくにゅりと捏ね回されると思わず仰け反る。まだ快感が抜けきらない身体を新たな快感で襲われて、シーツの

上でくねりながら逃げ惑った。

(もお、だめなのに……だめなのに……こんな、なんども……)

これ以上はいけない。これ以上は……乱されすぎて、身体がどうにかなってしまう。ほんのちょっとの刺激でさえ、今の志保にはこらえられない。

「や、やすませて……またいっちゃう……はぁはぁ……おねがい、おねがいだから……」

「そんな感じた表情して説得力ないよ。ほら、俺の指、好きだろ?」

大きなストロークで指を抜き挿しされ、漲りで犯されているときと同じ被虐感を味わう。身体が中から掻き混ぜられる。

颯馬は志保の上に覆い被さると、乳房を揉みながら舐めしゃぶってきた。乳首に舌を絡め、甘噛みしながら強く吸ってくるのだ。胸を吸われると子宮が疼く。それが雌の身体の本能だ。

「だめ……だめ……ひっ!」

じゅぶっ! と増やされた指を奥まで挿れられてしまい、目も口も大きく開く。

志保を貫いた指は子宮口の手前から襞をねっとりと撫で上げ、志保の好い処をトントンと押し上げてきた。漲りとはまた違う感触に弄ばれる。熱い舌が身体を這い回る。そして蕾まで嬲られて——

「アアッ!」

目の前に白い閃光が走る。呆気なく気をやった身体から、じゅわっと快液が染み出てシーツをびしょびしょに濡らした。

「……可愛い……愛してるよ」
一気に指を引き抜いた颯馬は、痙攣する志保の太腿を押し開いて脚の間に陣取ると、怖いくらいに反り返った漲りを見せ付けてきた。ぬらついたそれは、もう二度も精を放ったとは思えないくらいに猛りきっている。
「もっと可愛がってあげる」
颯馬の言葉に息を呑む。じゅんっと奥処から濡れてしまった。
また抱かれてしまう。いっぱい挿れられて、今度こそ壊れてしまう――でも、抵抗できない。
「あ――……」
ぬるんと入ってきた颯馬の漲りにどちゅっと奥処を突かれたとき、志保は強い快感に呑まれて気を失った。

◆　◇　◆

ぐったりとして眠っている妻の身体を拭いてやり、その横に自分の身体を横たえる。
颯馬は志保の頬をそっと撫でて、彼女の肩口に額を押し当てた。
（……）
あんなに夢中になって妻を抱いたのは初めてかもしれない。とにかく彼女の存在を確かめたくて、いつもより無茶をさせてしまった自覚はある。申し訳ないと思う一方で、今ここにいる彼女を強く

実感して落ち着いたのも事実。
妻とはお見合いのような出会いだった。たまたま顧客になった人が颯馬の仕事を気に入ってくれ、自分には年頃の娘がいるんだと写真を見せてくれたのが最初。家庭的なスナップショットだったが、眩い笑顔の美女がそこにいて、「よかったら紹介してほしい」と颯馬が言ったのだ。
実際に会った彼女は今思えば借りてきた猫のようにおとなしかったけれど、それでも頬を染めて俯く様子は可愛らしくて、一気に惹かれた。
大きなアーモンドアイで、まつ毛がくりんとしていて女性的な魅力にあふれていたし、自立して税理士として働いているという彼女のバックボーンもよかった。
付き合ってみた志保は男慣れしていない初心な子で、本当に可愛らしかった。そしてなにより面倒見がよくて気が利く。ちょっとツンとしたところもあったが、それは照れ隠しがほとんどで、思い遣りのある優しい子。颯馬がこれまで出会ってきた女の誰よりも彼女は純粋だった。
こんなに心が綺麗な女はいない――そう惚れに惚れてプロポーズした。
妻として彼女を迎え入れられたことは本当に幸運で、絶対に幸せにすると誓った。誰よりも大切にする、絶対に泣かせない。なにがあっても俺が護ると――
じゃあ、どうすればそれが叶えられるかといったら、とにかく仕事に力を入れることだった。
颯馬の実家は祖父の代から都市開発や、マンション・商業施設などの大規模な物件の開発事業を行う、所謂建設系の総合商社を経営していて、現在は颯馬の父親が代表を務めている。颯馬は男三人兄弟の長男なのだが、父親が「兄弟の中で一番業績がいい者を後継者にする」と言ったものだか

ら、何年か前から後継者の座を巡って兄弟で業績を競い合っていた。
仕事は好きだ。やり甲斐もあるし、控えめに言っても自分には営業の才能がある。売り上げを上げるのはゲームのようで楽しい。だからといって、後継者の座に執着しているわけではなかった。独身の頃は、「後継者なんて誰がなったっていいじゃん」なんて言っていたくらいだ。でも、結婚したら話は違う。
愛する妻にいいところを見せたい。頼れる夫でありたい。なにより彼女を社長夫人にしてあげたい。いいところに住まわせて贅沢させてやりたいし、万が一にも金に困る生活なんてさせたくない。じゃあ、後継者を目指してみるのもいいか？　なんて思っちゃったり。
彼女を幸せにすると誓った自分にできる最良のことは、仕事で成果を上げること。
颯馬は仕事に力を入れた。国内だけでなく、積極的に海外の仕事を取ってきて次々と業績を上げていった。その成果と引き換えに、家にいる時間は減ることになったけれど、それはしょうがない。なにより志保を愛しているから、颯馬は仕事を頑張れた。志保に会えることを励(はげ)みに、海外出張もこなしていたのだ。
志保も志保で結婚前から税理士として働いていたから、時間が合わないのは仕方のないことで、結婚した夫婦というのはそういうものだと思っていたのもある。それに、彼女はいつも「大丈夫」と笑ってくれていたから。
だが、颯馬は見てしまったのだ。
見た内容に確信は持てないまでも急いで帰宅してみれば、ソファの上で身を縮こまらせてひとり

横になっている妻の姿があった。それは幸せとは程遠いもので、一気に胸が締め付けられた。
広いだけの寂しい部屋でぽつんとひとり、孤独に過ごす。そこに笑顔はない。目を閉じて身を縮こませる姿は、なにかに耐えるようで……
いつもは予告して帰宅していたから、彼女のそんな姿を見ることはなかった。
いつも元気いっぱいに出迎えてくれていた。颯馬の好きな料理でテーブルを埋めて、笑顔で「お疲れさま！」と言ってくれる彼女に癒(い)やされていたのだ。
会話だってあると思っていたし、自分たちは仲がいいと思っていた。
実際、仲はいいだろう。一緒にいるときは会話もある。でも圧倒的に一緒にいる時間が少ない。
自分がいないとき、彼女はいつもああやってひとりだったんだと思うと切なくなってくる。
自分が彼女にあげたかった幸せは、本当にこれだったんだろうか？　本当にこれが正解だったんだろうか？　一瞬で生まれた疑問は、強い後悔を連れてくる。
どうして気付かなかったんだろう？　志保は寂しがり屋だった。言わないだけで、本当はひとりが嫌いな子だった。思い遣りがある彼女が、颯馬を心配させるようなことを言うわけがないのだ。なのに、「大丈夫」なんて自分に都合のいい言葉に甘えて、彼女をずっとひとりにしてしまっていた。
ゆっくりと萎(しお)れていくように……孤独(ひとり)で……
間違っていたのだ。なにもかも……彼女を幸せにする方法も、愛し方さえも。
このままでは、彼女の気持ちが離れていくのも時間の問題な気がする。

『あいつはあんたと結婚するより、俺と結婚したほうが幸せだったはずだ！』
脳裏をよぎるのは、志保に気がある男のひと言。
颯馬と志保の結婚式にも来たあの男は、未だに志保に横恋慕している。
結婚式で志保を未練たらしい目で見ておきながら、颯馬が気が付かないとでも思ったのか。独立したからと、志保に顧問税理士を依頼してきたときに感じたいやな予感が、間違いではなかったと今ならわかる。
絶対に離婚なんかしない。彼女を手放したりしない。誰にも渡さない……あんな後悔はしたくない……絶対に。
颯馬は常夜灯のぼんやりとした明かりを受けて眠る志保の顔を見つめた。形のよい唇が少しだけ開いていて、柔らかく瞼が閉じられている。疲れきって熟睡しているその寝顔は、完全に無防備で、どこか幼く見える。
（志保の寝顔……久しぶりに見た……）
それだけ志保をひとりにしていたのだ。こんなに愛しているのに……
颯馬は再び志保の頬にそっと触れた。柔らかく、あたたかい感触が指先に伝わる。それだけで、胸の奥がぎゅっと苦しくなった。
（今のままじゃ駄目だ……変えないと……！）
妻を全力で幸せにすると誓ったのだから。

◆　◇　◆

朝目覚めて、裸のままの夫に腕枕されていることに気付いた志保は、熱くなった顔を思わず両手で覆った。
（な、なんかものすごく盛り上がってしまった……！）
昨夜のことを思い出すと、恥ずかしさと新婚の頃のようなドキドキが交錯して、悶絶してしまう。もう、枕をバンバン叩きたい。隣の夫を意識してできないが。ひとりだったら確実にやっていた。
（ふぁぁ～～～～もうっ！　もうっ！　もうっ！）
昨日はなんという日だったんだろう。一日の最後の最後で、ものすごい幸せがやってきた。
夫が帰ってきてくれて、よくわからないけれど謝ってくれて、思いっきり抱いてくれて――夢だったんじゃないかと思うけれど、身体に残る心地よい倦怠感があれが現実だと教えてくれる。
（さ、三回とか……身体持たないよぉ……すごすぎる……）
「起きた？」
低く落ち着いた颯馬の声に、ハッとして顔から手を退ける。いつの間に起きていたんだろう？
柔らかく微笑んだ彼は、志保の頬をそっと撫でてきた。その手つきがすごく優しい。昨日の荒々しさはどこへやら……
「おはよ」
「お、おはよう……」

情事のあとの肌を見られるのが恥ずかしく、布団を口元まで持ち上げた志保はおずおずと尋ねた。
「……き、昨日、帰ってくる予定だったっけ？」
「いや？　本当は週末だったよ。予定が変わっただけ」
「そっか……」
やっぱり急な帰宅だったのか。
「……なにか、あった？」
突然の帰宅と、あの荒々しい行為の理由が気になる。昨日の彼は、明らかにいつもと違ったから。
颯馬は小さく首を横に振って、頬を寄せてきた。
「いや……君が一番大事なことに気付いただけ」
「……？」
きゅっと抱き締められて、肌の触れ合いに戸惑いながらも〝一番大事〟と言われたら、悪い気はしない。思わず頬が緩む。
今なら、ちょっと甘えてみてもいいだろうか？　ドキドキしながらほんの少しだけ颯馬のほうに顔を寄せてみる。すると、ちゅっと頬にキスされて顔が熱くなった。
「あと、君を他の男に盗られたくない」
突拍子もないことを言われて苦笑いする。
「そんなことあるわけないじゃない」
「でも言い寄られてるじゃないか」

そう言って彼が露骨に拗ねるものだから、志保の視線が泳いだ。
「んん……ん……」
（なんで気付いたんだろ……？）
二年前、結婚して少し経った頃に、独立した幡野が顧問税理士を依頼してきたことは颯馬にも話した。けれど、そのときの彼は、特に引っ掛かる様子もなく「そうなんだ？」と言っていたのに。
なにがあって急に幡野を目の敵にしているのかわからない。志保は彼を相手になんかしていないのに。
（嫉妬？　嫉妬なの？　きゃあ～）
幡野が自分に対して、友達としてもクライアントとしても不適切な態度なのは志保もわかっている。ただそれについて人に相談したことはない。もちろん、颯馬にもだ。だって、志保が応じなければいいだけだから。そのうち幡野も飽きるはず。
「志保」
颯馬は志保を呼ぶと、そっと抱き寄せ唇にキスしてきた。柔らかく唇を食まれると力が抜ける。ゆっくりと唇が離れたあと、彼は真剣な目で見つめてきた。
「全部やり直させてくれ。今度こそ、絶対に幸せにするから……」
その誓いのような言葉と共に、あたたかいキスが瞼に頬にと降り注いでくる。そして彼の唇が志保の首筋に来たとき、むにゅっと乳房が揉み上げられて――
「あっ」

思わず漏れた甘い声に、颯馬の口角が上がる。彼は乳房の膨らみに頬を寄せると、肌を薄く吸い上げながら、腰の硬い物を太腿に押し付けてきた。
「っ！」
くいくいと擦り付けられて、あまりの硬さに息を呑む。しかも、先走りでぬめっているではないか。昨夜、何度も志保を泣かせたあの漲りが、また志保の身体の中に入ってこようとしているのだ。
（あ、朝なのに……！）
昨日、あんなにされたのに、また朝から挿れられることになったら……。何度も体位を変えて、奥の奥までたっぷり咥えさせられたら……
颯馬のあの漲りで突き上げられ、中を掻き混ぜられる想像をしたら、ぶるっと身体が震えて、あそこが濡れてきた。まるで颯馬に抱かれることを望んでいるかのように。
「は……俺の奥さん……」
しかも、颯馬も志保の乳房を吸ってきて、手を脚の間に伸ばし――
「し、仕事に行く用意をしなきゃ！」
起き上がって思わず叫ぶ。そしてそそくさとベッドから脚を下ろした。
濡れているあそこに触れられる前に颯馬から離れないと。触れられてしまったら、言い訳できないし、拒めない。朝から挿れられてしまう！
ベッドの端に置いてあったルームウェアを着て、髪を整える。チラッと肩越しに颯馬を振り返ると、少し身体を起こした彼が、髪を掻き上げながら珍しく甘えた視線を向けてきた。はだけた布団

から、均整の取れた彼の綺麗な身体が見える。色白なのになよなよしたところなんてない、むしろ筋肉質で逞しささえ感じさせる身体。その男の色香にドキドキする。
「……仕事、か。行かなきゃダメ？」
「っ！」
仕事大好き人間の彼が、いつもなら絶対に言わないであろうひと言に、驚いて目を瞬かせる。
（急にどうしちゃったの！　そんなこと言うなんて！　颯馬さんらしくない！）
彼のくっきりとした二重の目元がいやに甘ったるい。格好いいのと可愛いのが大渋滞だ。
もともと彼の顔が好きなのもあるが、普段と違う表情を見せられると胸の奥がきゅんっと疼いてしまう。特に彼は年上なのもあって、志保に甘えるなんてことはなかったから余計に。
頼れる夫の珍しい表情を見られて嬉しい。自分に甘えてくる可愛い彼をもっと見ていたい。抱き締めたい。彼が望むなら仕事も休んでしまって、ずっと一緒に……
（ハッ！　いやいや、さすがにそれは駄目でしょ！）
惚れた男にメロメロになって、だらしなく緩みそうになる顔を引き締める。
「今日、クライアントのところに行かなきゃいけなくて。先にシャワー浴びるね」
そう言って立ち上がると、颯馬は残念そうにぱふんと志保の枕に突っ伏した。志保も名残惜しいけれど、今彼に抱かれてしまうと、本当に身体が持たない……！
颯馬の視線を振り切ってバスルームに向かう。脱衣所で服を脱ぐと、鏡で見た乳房が一ヶ所赤くなっていた。さっき颯馬に吸われた処だ。

（……もう……）
こんな痕を付けるなんて。夫の独占欲の証に、ぽっと頬が熱くなってしまう。
朝から何度も昨夜の情事を思い出してしまう自分が恥ずかしくて、志保は煩悩を洗い流すように、冷たいシャワーを頭から浴びた。
シャキッと目が冴えるのと同時に、腰の痛みが鮮明になってくる。あれだけ連続でされたのだ。そりゃあ、腰も痛くなるだろう。
（……ほんとすごかった……）
また思い出してしまった自分の頬をパチンと打ち、志保はボディソープをたっぷり出して身体を洗った。
シャワーを終えて、髪をタオルで包んで身体を拭く。そうしていると、「くちゅんっ」とくしゃみが出た。冷たいシャワーに当たりすぎたらしい。
ダダダダダ――ガラッ！
「大丈夫か？」
脱衣所の引き戸が開いて面喰らう。なんと、スウェットの下のみを穿いた夫が、フライ返しを片手に走ってきて、脱衣所の引き戸を開けたのだ。
まだ服を着る前で、思いっきり裸だった志保は、カアァッと顔を赤くしてタオルで胸を押さえた。
「えっ、な、なっ、なんで開けるの、や、やだ……」
ただ、くしゃみをしただけなのに。夫婦だし、お互いの裸なんて隅々まで見ている仲だけど、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。だってこんなの、着替えを覗かれたのと同じだ。お風呂だって一緒に入ったことはないのに。なのに颯馬は、瞬きもせずにじーっと志保を見てくるんだから。ちょっとは遠慮してほしい。
そうやって恥ずかしがって身体を隠す志保を見てなにを思ったのか知らないが、彼は親指を立ててニカッと爽やかに笑った。
「うん。すごくいい！　明るいところで見ると志保はいっそう綺麗だな！　スタイル抜群で！　今度明るいところで抱きたい――」
「な！　な！　な！　なに言ってるのよ、もおっ！」
明るいところで……だなんて！　なんて破廉恥な！
クールな夫の突然のエロ発言に赤面するしかない。
「えっち！　スケベ！　変態っ！　覗き魔っ！」
片手でぽかぽかと夫を叩きつつ、ありったけの悪口を並べ立ててやったのだが、颯馬は笑うばかりだ。
「ははは。可愛いなぁ」
背を向けた夫をようやく脱衣所から追い出す。しかし彼は、廊下に出たところで振り返り、ちゅっと志保の頬に口付けてきた。
「っ！」
突然のキスに驚いたのも束の間、志保は颯馬の腕の中に囚われてしまった。

「朝食、俺が作ってみた。あんまりうまくできた気はしないけどさ」
コツンと額を合わせた至近距離で囁かれ、またもや面喰らう。料理なんかしたことなかった人なのに、本当にどうしたんだろう？
「食べてくれるか？」
少し自信のなさそうな声色に、らしくなさを感じながらも、志保はこくこくと頷いた。
「うん。嬉しい……楽しみ」
「じゃあ、待ってるから早く来て」
今度こそ本当に脱衣所を出ていく颯馬を見送って、志保は鏡に映った自分の赤い頬を押さえた。
なんだかドキドキする。まるで結婚前の、彼に恋しているときのようだ。彼の予想外の言葉と態度にいちいちときめいてしまう自分がいる。
いつもと違う彼が不思議なのに、大好きな人から優しくされるとやっぱり嬉しい。
その優しさは今だけ？　それとも――
志保はもう一度鏡を見て、胸元のキスマークにそっと触れた。

着替えてリビングダイニングに入ると、テーブルに用意されていたのは、ちょっと焦げたトーストと、黄身が崩れた完熟目玉焼き。破裂したソーセージもおまけにあって、颯馬は申し訳なさそうに頭を掻いた。

「独り暮らししてた頃は、もうちょっとマシだったんだけど……」
「ううん。大丈夫。ありがとう。助かっちゃった」
席に座ると、颯馬も向かいに腰掛ける。彼とこうして一緒に朝食をとるのも久しぶりだ。ひとりじゃないだけでも美味しく感じられる。焦げたトーストはちょっぴり苦かったけれど。それは御愛嬌。
「これからは俺が朝食作るよ。練習する」
「え～っ、いいの？　嬉しい。じゃあ、お願いしちゃおっかなぁ」
「任せろ」
朝食を食べたあと、颯馬がシャワーを浴びている間に志保が簡単に後片付けをする。
白いブラウスと濃紺のスカートに着替え、メイクをしてから髪をふわふわに巻く。寝室に置いたドレッサーに映る自分は、露骨に機嫌がいい。表情に出すぎだと思いつつも、どうにもできない。だって幸せだから。
（消化不良がなければもっといいんだけど）
志保は自分のみぞおちに手を当てた。今朝もちょっと胃もたれがする。自分ひとりだったらスープしか飲まない日もあるのに、今日は颯馬がいるから朝から結構ガッツリと食べてしまった。念のために、また胃薬を飲んでおいたほうがいいかもしれない。
（でも嬉しかったな。颯馬さんが朝ご飯を作ってくれるなんて）
確かに上手とは言えない出来だったけれど、作ってくれたことが嬉しい。胃薬を飲んでいるとこ

ろを見たら、彼が朝食のせいかと気にするかもしれないからこっそり飲もう。
キッチンに戻った志保は、戸棚から昨日と同じ胃薬を出して、隅のほうで隠れて――
「……なに飲んでるんだ？」
突然、背後から声をかけられ驚いて振り向くと、スーツ姿の夫が壁から半分顔を覗かせた状態で、じーっとこっちを見ているではないか。いつからそこにいたんだろう？　びっくりした拍子に粉薬が気管に入ってしまい、一瞬咽せた。
「ケホッ、こほっ、こほっ……な、なんでもないよ」
慌てて取り繕ってみたものの、遅かったようだ。
颯馬は志保の手にある胃薬のパッケージを見たのか、怪訝な表情で近付いてきた。
「それ胃薬？　調子悪いのか？　ずっと？　――ハッ、俺の飯が不味くて……」
「違う違う！　ホントに違うから！　ご飯は美味しかったよ。ありがとう。ただ、昨日からちょっと消化不良な感じで、それで飲んでたの」
朝食のせいじゃないんだと念押ししたのだが、颯馬の眉間の皺は消えない。
「……消化不良？」
「昨日のお昼に中華食べたんだけど、油が合わなかったのかも」
「……ふうん？」
颯馬は少し考え込む素振りを見せたが、すぐに顔を上げた。
「志保、健康診断は受けたか？」

「えっ、健康診断？」
突然飛んだ話に首を傾げる。
「健康診断なら六月にしたけど」
そう答えると、夫は真顔で聞いてきた。
「それってどういう検査？」
「どういうって普通の……身長と体重を測って血液検査して……」
「それだけ？　もっと胃カメラとかエコーとか」
「そんな大袈裟なのはしないよ。事務所で毎年やってる定期健康診断だから」
志保が受けたのは、勤務先で義務的に実施される健康診断だ。希望すればオプションも付けることができるが、志保はまだ二十七歳。健康面に気になることなんてないので、型通りの検査しか受けていない。ちなみに、どこも異常はなかった。
「それがどうかした？」
「あのさ、この際だから人間ドックを受けてみないか？　俺が予約するよ」
（人間ドックって……まさかわたしが胃薬飲んでたから？）
たぶんそうなんだろう。なんだか心配してくれているらしい。
確かに最近ちょっと胃の調子が悪いけれど、胃薬を飲んでいればすぐ楽になる程度の軽い不調だ。
だいたい志保は、心配事や悩みがあると昔からすぐ胃に来る。仕事をしていれば、誰でも心配事のひとつやふたつはあって当たり前。こんなの全然大したことじゃない。

志保はくすっと笑って、ふわふわに巻いた髪を耳に掛けた。
「大丈夫よ。なんともないんだから」
「駄目だ！」
「っ！」
急に大声を出されて目を見開く。固まってしまった志保の反応に颯馬は口籠もった。
「……悪い、驚かせて」
気まずそうに首の後ろに手をやった彼が小さく咳払いをして、志保に向き直る。
「俺はさ、志保とずっと一緒にいたい。俺を安心させると思って受けてくれないか。人間ドック」
真顔で言われてしまい反応に困る。六月の健康診断でなにか異常があったなら、再検査なり人間ドックなりを受けるのはわかるのだが、志保はどこも悪くなかった。今胃の調子が悪いとは言っても、自分の身体は自分が一番よくわかる。これはただの消化不良だ。
志保は笑顔を作ると、彼のネクタイに手を伸ばした。ネクタイの結び目を綺麗に整えて、上着のホコリを軽く払う。今日の彼も男前だ。彼に不安そうな表情は似合わない。
「そんなに心配しなくたって大丈夫。ちょっと消化不良なだけだから」
そう言ったのだけれど、颯馬の表情は硬い。あまり納得はしていなそうだ。
「……志保、調子が悪かったら隠さずに教えてくれないか？」
「ん。わかった。これからそうするね。――あ、もうこんな時間。そろそろ行かなきゃ。ねっ？」
志保が首を傾げて促すと、颯馬は小さく息を吐いて頷いた。

「……車で送るよ。今晩から早く帰るようにするから夕飯は一緒に食べよう」
「うんっ！」
彼が早く帰ってきてくれるなら、この不調だって治ってしまうだろう。
志保は笑顔で颯馬のあとに続いて部屋を出た。

昼を少し回った時間帯の税理士事務所は、電話と指示出しの声が交互に飛び交って活気がある。そこへ、クライアントとの打ち合わせから帰ってきた志保が「ただいま戻りました」と声をかけると、みんなが一斉に「お疲れさま」と応えてくれた。この事務所には新卒の頃から勤めているのだが、アットホームな職場で居心地がいい。志保は中堅どころとして、任されているクライアントの数もそこそこ多かった。
「御影先生お疲れさまです！　頼まれてた領収書の整理、終わってます！」
志保のアシスタントに付いてくれている事務員の女の子が、デスクまで報告に来てくれる。志保はさっきの打ち合わせでクライアントから預かった領収書の束を鞄から出して、彼女に手渡した。
「ありがとう。今度はこっちもお願いね。ちょっと枚数が多いかも」
「はーい！　大丈夫です。――ところで先生、お昼食べました？」
「まだなの。今から食べようと思って」
「じゃあ、あたしもご一緒していいですか？」

立ち読みサンプルはここまで

アシスタントの声をきっかけに、近くにいた何人かの事務員の子たちが「私も」「私も」とわらわらと寄ってきた。昨日、一緒に中華を食べたメンバーだ。彼女たちが新人の頃に、業務について指導したことがあるせいか、志保を慕ってくれているらしい。この事務所では女性税理士は珍しいから、単純に話しやすいだけかもしれないけれど。

「もちろん。わたし今日はおうどんを食べたいなと思ってるんだけど、みんなはどう？」

胃の調子が悪いとは言わなかった。無駄な心配はかけたくなかったから。

「今日も暑いですもんね。夏バテやばーい。冷たいうどんなら美味しく食べられるかも」

「近くのうどん屋さんで、ゆずうどんののぼりがあったよ」

「へぇ、それいいじゃん！　賛成～」

じゃあ、財布取ってきますとみんなが一旦席に戻ったとき、鞄の中でスマートフォンがブブッと短く震えた。取り出して通知画面と見ると、颯馬からのメッセージだ。

『胃の調子、大丈夫？　俺は暑いからうどんにする』

体調を気遣ってくれる夫にほっこりして口元が緩む。今日、彼からのメッセージが来るのは、これで三度目。普段から連絡がマメなタイプならわかるが、彼はそうではない。新婚時でもここまで頻繁な連絡はなかったのに。

今朝、志保が人間ドックを断った理由を怖がっていると思ったのか、人間ドックの詳細とURLを送ってきて、『検査は怖くないよ』だなんて言う始末だ。志保は検査自体が必要ないと思っているだけで、別に検査が怖いわけではないのだけれど。

『大丈夫だよ。ありがとう。わたしもおうどんにします』

そう返事を送ってふと、『全部やり直させてくれ』と言った夫の表情を思い出す。

真剣な表情だった。どこか深い後悔を滲ませたような表情……。彼は決断力のある人だから、後悔なんて無縁だと思っていたのに。志保をひとりにしていたことを、そんなにも悔いてくれたんだろうか。

（いったいどうしたんだろう……？）

出張先でなにかあったんだろうかと考えても、志保にわかるはずもない。でも、本当に変わってくれようとしているんだとしたら嬉しい。だからこうやってマメにメッセージを送ってくれているんだろうから。

今日は早く帰ってくると言っていたっけ……一緒に晩ご飯を食べようとも……

『今度明るいところで抱きたい――』

「っ!!」

颯馬のことを考えていたら、今朝の彼の唐突な発言までも思い出してしまい、慌ててかぶりを振る。なんてことを思い出してしまったんだろう！

（……あ、あれ……本気なのかな……？）

本気じゃないとは言い切れない。なにせ、昨夜の彼はすごかった……本当に……本当に死んでしまうかと思ったくらいだ。

自分の身体に巻き付いてきた彼の腕を思い出す。まったく離してくれなかった。志保を押さえ付